奈良・阿弥陀浄土院跡

1　所在地　奈良市法華寺町
2　調査期間　第三一二次調査　二〇〇〇年（平12）二月～四月
3　発掘機関　奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部
4　調査担当者　代表　田辺征夫
5　遺跡の種類　寺院跡
6　遺跡の年代　奈良時代～鎌倉時代
7　遺跡及び木簡出土遺構の概要

調査地は平城京跡左京二条二坊十坪にあたる。同坪には庭園の景石と思しき立石が現存しており、天平宝字五年（七六一）六月に光明皇太后の一周忌斎会が行なわれた法華寺阿弥陀浄土院の故地と考えられてきた。同坪の北三分の一にあたる地域では過去に数次にわたる発掘調査が実施され、坤宮官の木簡も出土している（本誌第二一号）が、従来の調査地では阿弥陀浄土院にあったと考えられる池の痕跡は検出されていなかった。

今回の調査は、遺跡の残存状況を確認するための試掘調査で、坪南三分の二の中央東寄りに三本のトレンチを設定し、計三五五㎡の発掘調査を行なった。その結果、石敷の州浜をもつ池の東岸から南岸、その中に設けられた中島、池に浮かぶ礎石建物の礎石抜き取り穴群、池と併存する池中の埋甕遺構などを検出した。池の堆積土からは、金銅製宝相華文垂木先金具、同釘隠金具、同軸端金具など、寺院遺構にふさわしい遺物が出土し、この地が阿弥陀浄土院であったことが裏付けられた。礎石建物の下層には同位置に掘立柱建物の柱穴を検出しており、阿弥陀浄土院がそれと密接に関わる前身遺構の上に建てられた可能性を示唆する。地中レーダー探査でも、今回検出した池には二時期の池岸があったようで、阿弥陀浄土院は池を伴う前身施設を継承・改作して建てられた可能性が高くなった。阿弥陀浄土院の建立は、従来は光明皇太后生前の発願とされてきたが、近年の研究により、皇太后没後約一年という短期間で造営されたことが明らかにされている。外嶋院などの前身を改造・転用して建立されたとすると、短期間での造営も肯けよう。

木簡は、南側の東西トレンチ東端の池底堆積土から一点、北西区トレンチ南端の池中で検出した、池と併存する埋甕遺構の甕内埋土から削屑六点、以上計七点が出土した。前者と同位置からは、上部左右に二対の切り込みをもち、片面調整、片面未調整の封緘木簡状

木製品（長さ（一六五）㎜幅二四㎜厚さ四㎜）が出土している。

8　木簡の釈文・内容

池SG七七〇〇

(1)　×河国　遠江□〔国カ〕　(99)×19×5　081

埋甕遺構SX七六八六

(2)　□　091

(1)は上下折れ、左右は削りの原形を保つ。上には本来「参」の文字が続き、「参河国遠江国」と国名を列記してあった可能性が高い。荷札木簡ではなく、何らかの帳簿状の木簡の可能性が考えられる。(2)は「言」の文字が確認できるが、字体からみてこれは文字左半の言偏部分で、本来旁があったとみられる。

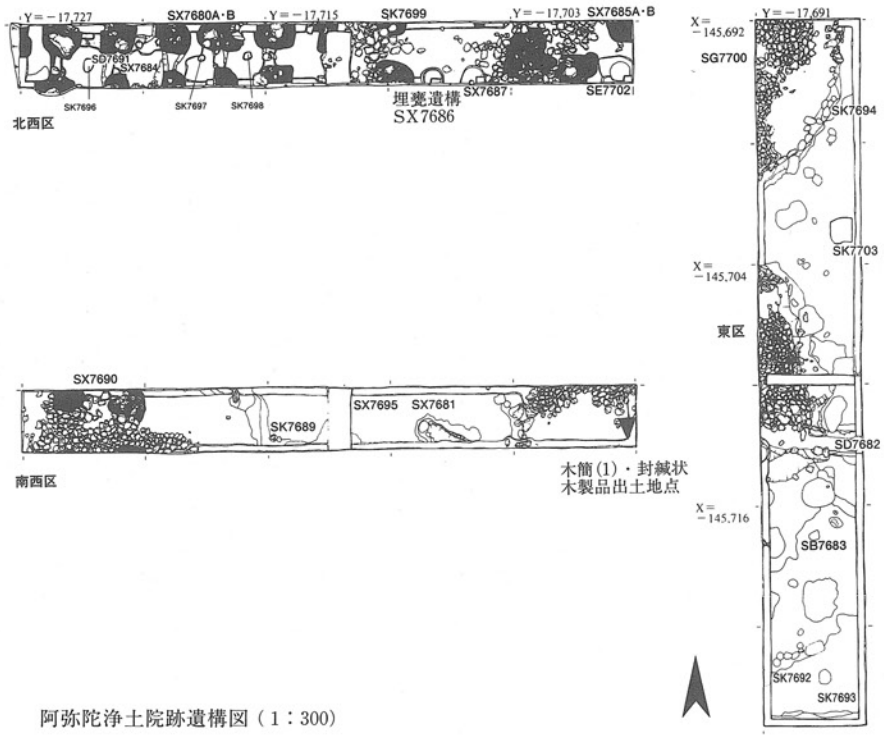
9　関係文献

奈良国立文化財研究所『奈良国立文化財研究所年報二〇〇〇―Ⅲ』（二〇〇〇年）

同『平城宮発掘調査出土木簡概報』三五（二〇〇〇年）

（渡辺晃宏）

(1)



阿弥陀浄土院跡遺構図（1：300）